

私の職場はブラッセルですが、Mons(モンズ)という街に住んでいます。人口10万人弱の学生の多い街です。長年住んでいると何かと愛着ができるのですが、好奇心旺盛な私。勝手にモンズの謎を七不思議として取り上げてみました。

1. 地名の発音

少しフランス語を勉強された方なら分かることですが、Mons という綴りはフランス語では「モン」と発音されることになります。エールフランスの機内でも、画面上の地図には日本語で「モン」と書かれています。それがなぜ、モンズと発音されるのかが不思議なところです。おそらくこの地名はフランス語以外が語源であるからだと思います。と言うのは「モンズっ子」に当たる言葉はMontoisでMonsoisではありません。この呼び方もとても変則でBruxelloisやLiegeoisのような語尾変化だけではなく、地名にはないTが入ってきています。これもまたこの地名の語源がフランス語ではなかったからだと思います。モンズには「モンズ方言—フランス語」の辞書があります。つまり辞書になるほど独立性のある方言だと思いますが、恐らくその方言の1つにMonsの発音とMontoisの表現があるのかと思います。

2. 約4000年前からこの付近に人が住んでいた。

モンズの東方約3キロの所にSpienneという村があります。今では普通の近郊住宅地ですが、冬の農閑期にその村の畑を訪れると、随所に白黒の岩の破片を見ることができます。それが黒曜石で作られた打製石器の残骸なんです。今から4000年ほど前、すでに人々はこの村の近郊に集落を作って生活していたそうです。そして驚くことに、その当時としては非常に珍しく、ほとんど狩りを行わず、家畜を飼育し、その他必要な物は生産された打製石器と交換していたそうです。そしてこの村の地下には今でも黒曜石が掘られた坑道が残っています。まず縦穴が5~25メートル掘られ、そこから枝のように横穴が掘られています。そしてそこで産出された黒曜石は打製石器に加工され、ヨーロッパ全土に流通していたと言われています。なぜ縦穴なのか。実は初めは川岸の露出している鉱脈に沿って、横穴を掘って石を採っていたそうですが、横穴ではどうしても落盤の可能性が高くなります。そこで堅穴を掘って、そこから適当な距離まで横穴を掘り、黒曜石を取り出し、落盤の恐れがあると、他の縦穴を掘って同じように黒曜石を採っていたそうです。ガイドの話では世界最古の生産工場だったとのこと。しかし磨製石器の登場と、それに続く青銅器の登場で、あっけなく廃れてしまったそうです。20世紀に入って廃れてしまったこのあたりの石炭産業を示唆していたように思います。

3. 鐘楼の抜け道（地元の古老の口承より）

モンズには高さ87メートルの鐘楼が建っています。パリへ行く高速道路からも確認できる建物でユネスコの文化遺産に指定されています。街の名前の通り丘の上に建っていますので、実際の高さよりもっと高く見えます。そしてこの鐘楼の足元は、実はエノー侯爵の要塞でもありました。Chateauと表示されていますが、中世の城のこと。ほとんど要塞の機能を持っていたと思われます。そして伝えられている話では、そこから東西に10キロほど抜け道が掘られ、馬も通ることができたと言われています。実際、その地下に戦争中馬を隠したとも言われています。後述するMachine a Eauから送られてきた水を一旦貯め、そして市街に供給した場所が残っています。

4. 配水基地？ Machine a Eau の存在

モンズは小高い丘の上につくられた街です。もちろん街中には川や池がありません。しかし鐘楼の足元には井戸の跡があり、またメインの教会であるSt. Waudruの前や、歩行者天国とグランプラスとの間に噴水があります。そして丘の中腹の市場の出る広場にも噴水があったそうで、これらの水は飲料水として、また生活水として使用されていたと言われています。そしてその配水基地がMachine a Eauと呼ばれる場所です。1871年に水圧を使ってモンズの市街へ水を供給していたと言われています。現在では展示会などのイベント会場として使われていますが、地下にはまだ貯水場が残っており、きれいな水を湛えていると言われています。残念ながら構内の噴水は濁っていますが、まだまだ豊富な水源があるようです。

5. 市庁舎の猿の像

市庁舎の入口に向かって左側に高さ50センチほどの猿の像があります。市庁舎についての資料はたくさん残っているのですが、この猿に関してはいつ、誰が、何のために作り置いたのかは分からないそうです。恐らく市庁舎を建設していた当時、アフリカ文化が伝わって来て、そこで珍しい動物として猿が紹介されたのを、時代を先取りした誰かが作り置いたのだらうと言われています。そして今日その猿の頭を左手でなげると幸せになると言われており、いつも猿の頭は人々になぜ

られているのでツヤツヤと光っています。

6. お祭り

毎年三位一体の1週間後に大きなお祭りがおこなわれます。Montoisたちはこの日を指折り数えて待っています。このお祭りは各教会の宝物を持って街を練り歩くProcessionとサンジョルジュと竜の戦いを再現した Lumecon の二つで構成されています。さて前半部のハイライトは黄金の馬車がSt. Waudru 教会にもどるとき、教会脇の長い坂道で立ち往生しないようにと何千人もの人たちが馬車を後押ししようとしています。これは途中で馬車が止まるととても悪いことが起こり、実際2度の世界大戦のときには馬車が登れなかったと言われていました。ですから今でも馬車のスピードが遅くなると悲鳴を上げる市民がたくさんいます。

また後半部のLumecon ではこの戦いの間に雨が降らないという言い伝えです。実際過去何度か雨の中でお祭りがおこなわれましたが、不思議とこの30分は雨が止んでいました。これも不思議な話です。

7. モンスの天使

1914年8月23日、モン스에서イギリス軍は前線で孤立し、ドイツ(プロシア)軍に包囲されてしまいました。イギリス軍は進退極まり天に祈るしか残されていませんでした。すると翌24日の早朝、空に弓兵が出現しドイツ軍に矢を放ち始めました。彼らの働きで多くのドイツ兵が倒れていきましたが、倒れた兵には傷がなかったと言われていました。弓兵たちの働きでイギリス軍は無事退却できたと言われていました。モンスの小さな戦争博物館にその絵が飾られています。しかし実際には英ジャーナリストの Arthur Machen 創作だとも言われています。

以上が勝手に取り上げた七不思議です。休日にお時間があればモン스에訪れてください。ブラッセルやアントワープなどがない、小さな街に深い文化を感じてもらえると思います。また列車で訪れるのも楽しいかも知れませんね。